

## 大蔵流茂山家狂言台本翻刻

坂本清恵・川上真由子・林美樹・シラージアンドレア

〔要旨〕平成二十六年年度に日本女子大学文学部日本文学科で入手した大蔵流茂山千五郎家の狂言台本二十七冊のうち、茂山眞一の署名と「茂山文庫」の印のある『鶏猫』と、茂山社中、橋本治夫の署名や印のある『二九十八』『呂蓮』『長光』の四作品を翻刻した。

茂山眞一は三世茂山千作で、現在の茂山千五郎家狂言一八四曲を整理したが、当該書も同様に大正末から昭和初期の茂山家千五郎家の狂言を書き留めた資料である。千五郎家台本は同時期の和泉流野村家の台本と比較し、狂言の特徴ともいえるサ行イ音便が多用されているところに特徴がみられる。

〔キーワード〕：茂山千五郎狂言台本・『鶏猫』・『長光』・『二九十八』・『呂蓮』・『長光』・サ行イ音便

日本女子大学日本文学科で平成二十六年年度に購入した大蔵流茂山千五郎家の狂言台本二十七冊のうち、平成二十七年年度に『千鳥』『狐塚』『入間川』『末廣かり』を翻刻したが、今回は、平成二十九年年度日本語学演習で取り上げた『鶏猫』『二九十八』『呂蓮』『長光』の四作を翻刻する。書誌などすでに報告したが、『鶏猫』は表紙に「茂山文庫」の印、裏表紙に茂山眞一の署名と花押があり、他の三作品は「茂山社中 橋本治

夫」によるもので、いずれも大正末から昭和初期にかけて茂山千五郎家の狂言を書き留めたものである。

同時期に出版された和泉流野村家の台本と比較すると、狂言に特徴的なサ行イ音便の出現に相違がみられる。和泉流野村家の台本にはイ音便が少なく、大蔵流茂山家の台本にイ音便が多く、その相違がはっきりしている<sup>②</sup>。また、大倉浩氏が狂言記正編のイ音便の例が「さす」をはじめ、全て語幹末母音がア列音の動詞の例であると指摘しているが、和泉流野村家台本のイ音便の例がこれに合致し、「致す・被らかす・でかす」にのみイ音便が現れる。これに対して、大蔵流茂山家の台本には語幹末ア列音で終わる「致す・でかす・話す」などはもちろん、ア列音以外の「隠す・殺す・直す・許す」にもイ音便が現れる。前回と今回の合計八作品におけるサ行イ音便と非音便の現れ方は以下のとおりである。不明としたものは、送り仮名がないものである。狂言の特徴的なものとしてサ行イ音便を多用していることがわかる。

サ行イ音便	サ行非音便	サ行不明
致す 15	貸す 1	思し召す 2
追い走らかす 4		指す 1
追い払らかす 1		済ます 1
遣す 1		出す 2
隠す 1		話す 1
翳す 1		申す 17
食わす 1		
殺す 6		
探す 1		
済ます 3		
出す 7		
でかす 2		
直す 5		
流す 1		
成す 3		
話す 5		
囃す 1		
許す 3		

翻刻にあたって

・漢字かな交じりの本文であるが、促音の書き表し方が書写者によって異なり、本文に並書きで書き込まれる場合、後から本文脇に「ツ」と添えられる場合、本文脇に「ツメ」と書き添える場合がある。本文脇に促音を後から書き入れたものは「ツ」として本文に組み入れた。

・節付けのある部分については、文字のみ翻刻し、胡麻章が施された部分には傍点を付した。

・『鶏猫』に書き込まれた役柄など、朱の書き込みは「」に入れて示した。

・『二九十八』にある、本文の左に朱で書き込まれたト書きはへ〜で

囲んで本文行に翻刻をした。

・「迄」は「迄」に翻刻した。「水」を「氷」とするなど、明らかな誤字は直した。

なお、『鶏猫』の翻刻は全員で分担し、『二九十八』はシラージ・アンドレア、『呂蓮』は林美樹、『長光』は川上真由子が担当した。

翻刻『鶏猫』

〔内大名〕

(茂山文庫)

〔内神文〕

大蔵流

鶏猫 六義【表紙】

鶏猫

〔大〕是は伊豫の国の住人。高野の某です。此間某の秘蔵の猫が見へ舛せぬに依て。色く尋ぬれ共。兎角行衛が知れ舛せぬ。夫に付思案を致いた事が御座る。先太郎官者を呼出し申付る事が御座(大名物呼出／常の通り)【二才】汝を呼出すは。別成事でも無い兼て尋ぬる。猫の行衛は何とした。〔太〕去れは其事で御座る我等も方々と詮義致舛るが今に知れ舛せいで。迷惑致し舛る。〔大〕夫ならば。此上は高札に立ひ。〔太〕畏て御座る〔大〕高札の表には。猫の行衛を【二ウ】申来る者が有らば。勲功はこうに依るべしと打てをけ〔太〕心得舛した。〔大〕又申来る者有らば此方へ奏をせい。〔太〕畏て御座る。〔大〕エイ引〔太〕ハア引〔太〕扱もく一段の事を仰出された。急ひで高札を打ふ是くこれで能ふ

御座る【二才】「子」罷出為者は此當りに住居致す者で御座る。此国の守護人。御秘藏の猫を失われ。色く御尋被成るれど。兎角知れぬと有て。猫の行衛を申来る者有らば。勲功はこうに依るべしと。高札を打れたと申。扱夫に付【二ウ】御秘藏の猫は。某の親が殺いて御座る。もし此事が。余人の口から御耳へ入たならば。親子は申に不及。一門迄も迷惑致す程に此事を某が申上。此度の勲功に。親の命を申受ふと存る。乍去。誠か偽りか参て見ふと存る。先急で【三才】参ふイヤ誠に。もし此事が誠で御座らば。某の望みを叶へてもらふと存る。イヤ参る程に早是に高札が有る。すれば誠で御座る。急で此由申上ふ(案内／常通【太】案内とは誰ぞ。「子」高札の表に付て参た物で御座る其通り仰られて被下い。「太」其【三ウ】由申上ふ。暫く夫に待たしめ「子」心得舛した。「太」申上舛る高札の表に付て。稚い者が参て御座る。「大」何じや高札の表に付て。稚い者が来たと言か。「太」左様で御座る。「大」夫は一段の事じや。早ふ是へ通せ。畏て御座る。イヤ能ふく斯通【四才】通らしめ。「基子」畏て御座る。「太」申此者で御座る。「大」ヤイく汝は何くの者じや。「子」私は此當りの者で御座る。「大」そちは猫の行衛を知ているか。「子」如何にも存て居り舛る。「大」夫ならば何者が捕へている早ふ言て聞せい。「子」何が扱【四ウ】申上舛せふが。高札には。勲功は功に寄るべしと御座るが。若是が誠で御座らば。私の望みを叶へて被下る、か。「大」何成共叶へてとらせふ。「子」逆もの事に御誓言を以て承り度ふ御座る。「大」弓矢八幡偽りは言わぬ。早ふ言て聞せい。「子」夫ならば申上舛【五才】せふ。此所の。藤三郎と申者が殺いて御座る。「大」何藤三郎が殺いた。「子」中く。「大」言語同断悪い奴じや。すれば碗と見届たか。「子」加様申上舛るからは。偽りは申舛せぬ。「大」夫ならば汝を。後日の證據に立る程にそふ心得い。「子」畏て御座る【五ウ】

「大」先夫へ寄ていよ。「子」心得舛した「大」ヤイく太郎官者。「太」何事で御座る。「大」今のを聞たか。「太」如何にも承て御座る。「子」扱く憎い奴じや。急ひで藤三郎を引立て来い。「太」畏ては御座れ共。アノ藤三郎は。日頃心得た者で御座るに依て【六才】私一人では成舛るまい。「大」ム、夫ならば両人の者をも連て行け。「太」心得舛した。「大」亦ぬかるな。「太」ぬかる事では御座らぬ。「大」早ふ行け。「太」畏て御座る。「大」エイ引【太】ハア引 能く両人の者をりやるか【両】是にいる。「太」兼て御尋ねな【六ウ】さる、猫の行衛が知れぬと有て。高札を立させられたれば。此所の藤三郎が殺いたと言て。証人致いた者が有に依て。急で藤三郎を召とれと仰付られたが。き奴は。日頃心得た者じやに依てすは参るぞ懸かるぞでは【七才】召取られまいが。何とした物で有ふぞ。「次」おしやる通りき奴は日頃大力な者じやに依て聊爾には召取られまいが。何とが能かるふぞ。「三」誠に何とた物で有ふぞ。「太」イヤ能い事が有る。先が先へ往て案内を乞うて呼出そふ程に。和御【七ウ】料達は間合を見て繩をかけさしめ。「両」是は一段の調儀でおりやる。「太」夫ならば身共は先へ行程に。つがいの抜けぬ様に来て呉さしめ。「両」心得た。「太」必ぬかるまいぞ。「両」ぬかる事では無い。早ふ行かしめ心得た。「太」何とぞまんまと【八才】しおふせ度い物じやイヤ参る程に早是じや。先案内を乞(案内／常通)「太」今来るも別成事でもおり無い。頼ふだ御方チトそなたに急な御用が有との事じや急で御出やれ。「仕手」何某に急の御用。「太」中く。「仕手」イヤ夫ならば追付て行う。【八ウ】「太」サアくおりやれく。「仕手」参るく。扱某に急な御用とは何で有ふぞ。「次」がきめ。「仕手」何とする。【三三】取たぞ。「仕手」憎い奴の。「太」サアく早ふ繩を懸さしめく。「次」がきめ。「仕手」何とする。「次」何とすると言て覚が有ふ。「太」出か

いた【九オ】く。急いで引立ておりやれ某は申上ふ。「両」心得たサアく行けく。「仕手」扱もく苦く敷い事じや。「太」申上舛る。藤三郎を召取て参り舛した。「大」夫は出かいた。急で是へ連れて来い【太】畏て御座る。サアく早ふ【九ウ】連て渡しめ。「両」心得た。「大」ヤイく汝は某の秘蔵の猫を殺たと言が誠か。「仕手」是は思ひも寄らぬ事を御尋ね被成る、。私は左様な猫は終に見た事も御座らぬ。「大」イヤくしかと汝が殺いたと言者が有つ、まずと言へ。「仕手」御詞を【十オ】返舛るは如何がでは御座れ共。私は曾で存ませぬ。夫は定めて。人違ひで御座ろふ。「太」是にはたしかな證據が有が。夫でも知らぬか。「子」其證據には。私が立舛した。「仕手」ヤア何己が申上た。「子」中く。「仕手」やあら己は憎い奴の。如何に【十ウ】稚い者じやとて。親のとがを申上ぐれば。汝迄御とがめの有事を知ていながら。己の口から申上げ。親を此様に縄目に逢すと言事が有者か乍去此上は是非に及舛せぬ真すぐに申上せふ。「大」早ふ言へ。「仕手」何を隠し舛せふぞ【十一オ】私も。秘蔵の鶏を乞うており舛るが。此間何ツ方からやら猫が参り。鶏をくわへて逃舛るに依て。何心無ふ打殺いて御座るが。見舛すれば承り及ふだ。御秘蔵の猫で御座る。若此事が知れ舛したならば御咎めも有ふ【十一ウ】と存じ。深く隠いて御座る。又是成者は。私の一子で御座るが親を見捨御忠節申た者で御座ろふ。殿の為には忠の者。私の為には。此子が敵で御座る。乍去加様に申上舛るからば。何卒命を助けて被下い。「大」能ふこそ【十二オ】申上たれ。乍去。汝が敵は猫にて有物を。何とて我等子を敵とは申ぞ。「仕手」是は御詞とも覚へ舛せぬ。猫の敵はにわとり。私の敵は此子では御座らぬか。「大」イヤく猫の敵は汝に定た。とこを言へは時刻が移る。只一ト打にして遣ふ。【十二ウ】「子」ア、悲しや先待たせられい。「大」何と待てとは。「子」此度の勲功に。親の命を助

て被下い「大」夫ならばなせ申上た。「子」去れば其事で御座る。若此事が余人の口より御耳へ入たならば。親子は申に及ず。一門迄も迷惑致そふと存じ申上【十三オ】舛した。何卒此度の勲功に親の命を助けて被下い。「大」ム、汝の言所は尤なれ共。此者は咎有者じや。助くる事は成らぬ。そこを退け只一ト打にして呉う。「仕手」先待たせられい。「大」何と待てとは。「仕手」夫に付思ひ出す事が御座る。【十三ウ】昔敬養國ケイキョクの民の者病をうけ羊をふくして直ると言夢を見て。帝御秘蔵の羊を盗み。夫をふくして息才とは成たれ共。帝逆鱗舛しまし高札を立られ。勲功に親の命を申請んが為。子が證據に立て。命を助た例も御座らば【十四オ】何卒私も命を助て被下い「子」其上子が證據に立て。親を殺させては。天道の罰も恐敷ふ御座るに依て。此上は私から先へ御成敗被成て被下い。「大」扱てく。汝は。年にも似合ぬこびた事を言物じや。汝には余の褒賞ホウシヤウを取らする。此【十四ウ】者は咎有者じやそこを退け只一ト打にして呉う。「子」すれば最前の御誓言の無に被成ざる、か。「大」夫じやに依て。汝輩には。余の望みを叶へて取らすると言に。「子」何と親を殺させて。私が生ていられ舛せふぞ。此上は。私【十五オ】から先へ。御成敗被成ねば。爰を一寸も。動舛せぬ（大泣）「大」下アノ夫でな。「三人」下あふ引。「一同」（一同泣）「大」天晴孝心な者じや只一ト打とは思へ共。此者の心中を感じたれば。太刀の打付け所が無い。最早命を助くるぞ。「子」夫は誠で御座るか【十五ウ】「大」誠じや。「子」御真実で御座るか「大」則太刀も鞘に納むるぞ。「仕手／子」ハア引偏へに命の親と存舛る「大」早縄目をとひて遣れ。「子」畏て御座る。「仕手」是は有難ふ御座る「大」何と今は氣遣ひに有たか。「仕手」毎くより御気色替らせられて御座るに依て。随分身【十六オ】の毛をつめており舛した。「大」某も毎くより腹は立たれ共。此者の心中を感じ。

太刀の打付所が無いに依て。命を助けた。天晴孝心な者じや随分大切にいたわて取らせい「仕手」有難ふ御座る。「大」扱何ぞ褒美とは思へ共何も無い。「十六ウ」是は重代なれ共。あの者へほふ美に取らす。是を持って目出度ふ我家へ帰り候へ。「仕手」謡有難の御事や。あら有難の御事や。「地」慈悲有る殿の御情。咎有る親の「命をたすけ給ひし志。天にも上る心持して。父何某を肩にか【十七オ】け。帰るぞ嬉しかりける。」

〔仕手〕

一 小格子着流し 一 腰帯無地

一 墨絵中啓 一 襟うす者

〔大名〕

一 素袍 一 洞烏帽子

一 紅白幅のし目 一 少刀

一 扇子 一 紅ゑり

〔子〕

一 半上下出立

〔三人〕

一 半上下出立

〔作物〕

一 太刀 一 葛桶

一 縄（腰布壺尺五尺）【十七ウ】

茂山真一（花押）【裏表紙】

翻刻『二九十八』

（橋本氏蔵）

（平物毘女狂言）

大藏流

二九十八

六義

（橋本治夫）

【表紙】

大正拾三年五月

アド

乙

【表見返し】

二九十八

〔仕手〕（名のりザ）罷り出為者は此當りに住居致す者て御座る 某近頃恥敷い申事乍未だ定る妻が御座らぬ 夫に付清水の觀世音は現仏者じやと申に依て是より妻乞の祈誓を懸けに參ふと存る先そ【一オ】（道行）ろりくと參ふイヤ誠に清水の觀世音は靈現あらたに御座るに依て加様に祈誓を懸けたならば御利生の無いと申事は御座るまい（真中正向キ）イヤ何かと申内早御前で御座る（右へ見マワス）ハ、ア毎參ても夥敷い參詣じや先拝を致そう（ザニ）（扇開キ礼スル）あら有難や（南無【二ウ】大慈大悲の觀世音菩薩私未だ定る妻が御座らぬに依て何卒能い御妻を授けて被下い 南無大慈大悲のかんぜ音ぼさつ 荒有難や（見マワス）ハ、ア毎參てもしんくとした殊勝そふな御前で御座る 更ば今宵は是にて【二オ】通夜を致そふか（扇スボメヒザへ立テ頭横ニネムル）ハ、ア引（一足下り扇開キ礼拜スル）荒有難や南無大慈大悲の

かんぜ音菩薩荒有難や〜(扇サス)あらたに御霊夢を蒙た 西門の一のきざ橋に立たせ置くを汝の妻と定めいと御事じや(立二度道行キ)更は急ひで西門へ参ふ イヤ誠に清水【二ウ】(此目分二女カズキカブリテ一ノ松へ出立居ル)の觀世音は承り及ふだ現佛者で御座るに依て定めて能い御妻を授て被下るで御座ろふ(真中)イヤ何かと申内早西門へ参た 扱此當りは御妻らしい人は見へぬがどこ元へ(笛ノ上ヨリ右へ見マワシ)いらる、事じや知らぬ(女ヲ見て恥シソウニスル躰)(笑)去れはこそあれへやごと無い【三オ】御姿でつツくりと立たせられた定めて御無相の御妻で有るふが人違ひと云事が有るに依て是は問ふて見ずは成まいが近頃恥敷い事じや加様な事と知たならば 誰そ人をも頼ふで参ろふ物を近頃残念な事を致いたじやと言て毎が毎【三ウ】迄問ずにも居られまいこりや恥し乍問ふて見う(名のりザへ腰ヨリ下タデ合掌如何ニモインギンニ口傳) ハアー申〜 夫へつくりと立たせられ舛したはもしや御夢相(笑乍元へ戻ル)引一(笑)如何なく中〜恥敷ふて問わる、事では無い(見マワス)誰そ通れかし人に頼み度い物じやが折節誰れも【四オ】通らぬこりやのし切て問て見う(萬同行)ハアー申〜 夫へつくりと立たせられ舛したはもしや御夢相の御つ……(笑)如何なく中〜恥敷ふて問わる、事では無い是は先何と致そふ(ヒザ一ツ打チ)お、夫〜男の心と大佛の柱は太い上が上にも【四ウ】太かれと申思ひ切て問ふて見う(萬同行)ハアー申〜 夫へつくりと立たせられ舛したはもしや御夢相の御妻殿では御座らぬか【女】夫も無き【仕手】ヤア引【女】我身一ツの小衣に【仕手】ヤア〜【女】袖を片しく獨り寝ぞする【仕手】(元へ戻ル)ほふこりや【五オ】歌を詠ませられた(吟ズ)袖をかたしくひとりねぞ(右袖見ル形モ有)する〜ハ、アこりや疑ひも無い御夢相の御妻じや 乍去御迎を進ぜずば

成まい御宿をも問て見う(萬)ハア、申〜夫ならば御迎を進ぜ度ふ御座るが御宿はどこ元で御座るぞ【女】我宿は【五ウ】【仕】ヤア【女】春の日奈良の町の内【仕】ヤア〜【女】風の當らぬ里と尋ねよ【仕手】(元ノザへ)ほふ又歌を詠ませられた(吟ズ)風の當らぬ里と尋ねよ〜ハ、ア引風の當らぬ里ならば定めて室町の春日町の事で有るふ是は御宿は知れたが角から【六オ】何軒目と言事を問わずは成まいが惣じて人に歌をよみ懸られ 返歌をせいで後は世に口無い虫に生る、とやら申何卒返歌を致したい物じやが イヤ致し様が御座る(萬同行)ハア引、引春日成る里とは聞けど室町の角よりしてはいくつめの家【六ウ】【女】二九引(ト云テ直ニ幕へ入ル)【仕手】(右手サス)ア、申〜先またせられい〜是は如何な事二九と計り仰られて早どれへやられたほ、身共が憎いと言事が知らぬイヤ〜 御夢相の御妻じや物憎からふ様が御座らぬ ハ、ア引こりや九九で返事を召され【七オ】た物で有るふ 九九ならば定めて 二九引十八軒目の事で有るふ 更は急ひで室町へ参ふ(道行)イヤ誠に(仕手道行ノ間ニ女再ヒ笛ノ上ヨリ出ル)御夢相の御妻は格別じや 歌を詠ませらる、三弦にも達せらる、定めて美目も美敷い事有ふイヤ何かと申内早室町へ参【七ウ】た先角より(名乗ザニテ一軒言ニ大キク合点スル右ヨリクリット左へマワル口傳)しては一軒二軒 三軒 四軒 五軒十軒十五軒 十七軒 十八軒去ればこそ是じや先案内を乞う物も案内も【女】イヤ表に物申と有る 案内とは誰ぞどなたで御座る【仕手】そつしな申言乍若しや此方は最前【八オ】西門で御目に懸た御夢相の御妻では御座らぬか【女】如何にも童で御座る【一】最前から此方の御出と存じ待て居り舛した【仕手】夫は幸の事で御座る【女】サア〜斯通らせられい【仕手】すれば通ても苦敷ふ御座らぬか【女】中〜つう【八ウ】と通らせられい【仕手】夫

ならば真平許させられいへト云テ兩人共ワキ座ヨリ間半程右二正向キヤス  
 「女」(仕手は女ノ右ナリ) 扱此方の御出と存じ竹筒を用意致いて御座る  
 「仕手」夫は一段の事で御座る 夫ならば開いて参り舂せふ 「女」夫が能う御座り舂せふ(後見ザヨリ葛桶ノフタ取扇開キ盃ノ通り)「仕手」扱惣じて婚禮の盃には【九オ】女より舂ふで男へさす物じやとやら申するに依て先是は此方より始めさせられい「女」夫(盃取り受ル)ならば童から頂き舂せう「仕手」(酌萬通り)則私が御酌を致し舂せう「女」夫は慮外で御座る 「仕手」それくくくく 「女」お……丁度御座る「仕手」誠に丁ぞ御座る 「女」頂舂る【九ウ】「仕手」目出度ふ御座る(女舂時ハ少しハズシ面見セヌ様ニ舂ムガ吉し) 扱是を此方へ進ぜ舂せふ 「仕手」とれく(手酌ニテ舂ム)頂舂せふ お、丁度御座る夫ならば私も頂舂る 「女」目出度御座る「仕手」扱又是を(文句通り)此方へさし舂せふ「女」どれく頂舂る一ツ諷わせられい「仕手」心得舂した(諷一バイニ盃ヲツクナリ)(懸けて通へやヲ諷フ)「女」ヤンヤくく 「仕手」不調法を【十オ】致いて御座る(舂ム)「女」又是を此方へ進せ舂せふ 「仕手」どれく頂舂る 「女」又諷わせられい「仕手」心得舂した(手酌テテ舂ム)(千歳の命を延るヲ諷フ)「女」ヤンヤく 「仕手」しだいにくにぎやかに舂舂した 「女」其通りで御座る(取ツテ舂ム)「仕手」扱盃事も目出度ふ納め舂せふ 「女」夫が能う御座る【十ウ】り舂せふ(後見ザニテ納メテ元へ戻り)「仕手」扱て盃事もすんで目出度ふ御座る「女」有難う御座る 「仕手」扱此方と私は千年も万年も中能う添い舂せふぞ 「女」近頃嬉敷ふ御座る 「仕手」夫ならば對めんを致そう程に其かづきを取らしめ 「女」(カブリフル)童は恥しう【十一オ】ていやで御座る 「仕手」近頃尤なれ共其儘同道も舂舂せに依て平におとりやれ 「女」(カブリフル)童はどう有ても

恥敷うていやで御座る 「仕手」いやじやと云て毎が毎迄様にして居らる、物か(仕手立テカズキヲ取りニ行ク)どれく夫ならば某が取て進ぜう(女イヤガルヲ無リニトリ笛ノ上へ捨ル)「女」童はいやで御座るく【十一ウ】「仕手」(後見ヨリカズキ引ク)更は對面を致そうと存る(女カズキ取ラレテ立兩袖ヲ上ゲ正向キ居ル仕手女ノ面ノゾキビツクリスル)(名乗座へ逃ル)是は如何な事觀世音もかんぜおんじやあの様な悪女と何とそわる、物か 扱もく苦く敷い事じや 「女」(兩袖フリ乍仕手ノ左手ヲ取り引戻ス)イヤ申く(此方はどれへ行かせらるぞ千年も万年も中能うそふとは【十二オ】仰られぬか何卒童が添ばに居て被下いの引く)「仕手」(迷惑ソウニ)アイヤどれへも参らぬちと忘れた物が有るいて取て(フリハナス)参るふ 「女」イヤ申く(又引戻ス)忘れさせられた物が御座らば童が方より人を遣り舂せふ何卒童がそばにいて被下いの引く 「仕手」ア【十二ウ】(右脇腹ヲサヘル)ア、痛くく 「女」お、何と被舂舂したく 「仕手」虫腹がいたいいて薬りを取て(引ハナス)参ふ「女」(引戻ス)イヤ申く御くすりならば童が方に能いのが御座る何卒童がそばにいて被下いの「仕手」夫ならば有様を申そうか 「女」有様を仰られい 「仕手」有様は【十三オ】「女」(返す)忘れた物も無し(ナシ)(返す)「仕手」腹も痛ふは無けれ共(なけれ共)(返す)「仕手」難方身共やと云て此方の様な悪女と(女ヲ突コカシ兩袖打)何とそわる、物か(扱ヒ逃込ム)ア、うるさやなく許いてくれい 「女」(コカサレテ兩袖ハラヒ追込ム)アイタくいや申く(如何ニモ優ナル女ヲシク形スル)童を此様にしてどちへ行かせらる、童も一しよ【十三ウ】につれていて被下いの先またせられい(くく)

〔仕手〕

一 半上下出立

〔乙〕

一 女 出立

一 乙面 一縫袖 かずきにする

〔作物〕

一 葛 桶【十四才】

茂山社中

橋本治夫（橋本氏蔵）【裏表紙】

翻刻『呂蓮』

（橋本氏蔵）

〔平物出家座頭狂言〕

大蔵流

呂蓮 六義

（橋本治夫）【表紙】

大正拾三年三月

アト 呂蓮【表見返し】

呂蓮

是は遙か遠国方の出家で御座る 某未だ上方を存舛せぬに依て此度思ひ

立都へ登り名所旧跡残る所無ふ一見致そふと存る 先そろりくくと参ふ

イヤ誠に出家と申者は 若い時に修行を致さねば【一才】年寄て口がき

かれぬと申程にふと思ひ立て御座る 是は如何な事 未だ程も参らぬに早

日が暮る 更は此當りで宿を取ふと存る 物申案内申 イヤ表に物申と

有る 案内とは誰そ などで御座る 行暮た修【二ウ】行者で御座る

一夜の宿を借て被下い 安い事かして進ぜ舛せふ 斯通らせられい

夫は有難ふ御座る つふと通らせられい 心得舛した 其當りにと

ふど御座れ 是はかまわせらるゝな ヤイく旅の御出家を老人御

【二才】宿申た程に 一飯を拵へい エ引 イヤ申く ちと御くたひれも

退舛したか イヤ諸々を巡る者の事で御座るに依て さのみ草臥も致ま

せぬ 夫は何よりで御座る 扱私は此當りでも つふつと志の深い者で

御座るに依て【二ウ】旁の様な旅の御出家を見れば 悦ふで御宿致す事

で御座る 今宵は近頃むさくろ敷い所へ御留申面目も御座らぬ 扱 /

夫は奇特な事で御座る 出家と申者は人の哀か無ふては旅は成らぬと申

物で御座る【三才】今宵は御宿を頂祝着に存舛る 扱只今一飯を申付

舛したに依て程無ふ出来舛ふ 何卒御草臥にも御座ろふか 其間に御教化

を被成て被下ふならば 忝ふ御座る 何教化が聴度いと仰らるゝか

中く。【三ウ】扱く脩生シュシヨウな事じや 安い事話いて聞せ舛ふ 能ふ聴

せられい 畏て御座る 別に教化と申て 六ヶ敷い事でも御座らぬ

只後生を願へと申事で御座る 有難ふ御座る 此方程加報な御方は御座

らぬ 先見舛た處家居もつき【四才】く敷ふ御座る 定めて御子達も数

乍御座ろふ 如何にも御座る すれば此世の願はサットすんだと申

物で御座る イヤく左様では御座らぬ 只今日をうかくと暮る分の事

で御座る イヤく惣じて人間の身の上の願い【四ウ】と申物は限

りの無い物で御座る 名利名間に溺れ欲によくを重ね 今日只たるを知



らぬが人間の情で御座るハアリ 生者必滅と申て此世へ生ずる物は必めすと云事を皆人事に口には云へども正敷我身の上【五オ】に有を知らぬ 果ない浮世で御座るに依て 只後生を願わせられたが能ふ御座る

有難ふ御座る 惣じて人間の命の果い事は 風の前の灯火 水の上

のあわ雷光朝露 石の火よりも未だ果ない人間の命で御座る【五ウ】既に朝開暮落と申て朝貞の花にもたとへ置れて御座る 朝と申物は花は華麗な物で御座るが 早朝には開き日の出するに従てしほみ夕辺にはホロリと落る 人間も其事くけふ有てあす無い命出る息引く【六オ】息を待たぬ果ない浮世で御座るに依て 只後生を願わせられたが能ふ御座り外せふ 有難ふ御座る 何と此生者必滅が御合点が参り外したが 得と合

点致いて御座る イヤ是さへ御合点が参れば外に申事は御座らぬ

下手の【六ウ】長談儀は高座のさまたげとやら申外る 今宵は是にて仕舞外せふ 扱もく有難御教化を初めて承て御座る 扱御坊にチト御願が御座る 夫は又如何様な願で御座る 私兼く出家に成度くと存る

處 只今の御教化を承て【七オ】得道致いて御座る 何卒此方の御弟子に被成法鉢にさせて被下ふならば忝ふ御座る 何出家に成度と仰らる、

か 中く扱く奇特な事く御座る 乍去此出家と申物は朝夕の勤

行の又は旦那あしらいのと申て中く六敷い物で御座る【七ウ】其上加様な事は御一門衆や又御内儀共御相談被成御得心の上ならでは成らぬ事で御座る 去れば其事で御座る 最前も申通り私は常く志のふかい者で御座る 毎ぞは法鉢致ふと存 一門衆や女共にも相談の致し何れも得心

【八オ】致いており外るに依て是非共法鉢にさせて被下い すれば御一門衆や御内儀にも御得心の上で御座るか 左様で御座る 其儀ならば

兎に角もで御座る 先つむりをもなせられい 心得外した 何と能

ふもめ外したか 一段と能むめました【八ウ】夫ならばそれへ出させ

られい 畏て御座る 先三帰五戒を授け外る 南無帰依佛く 南無

帰依法引く 南無帰依僧く 南無帰依佛教 く 帰依法教く 帰依

僧教く ゾリくくくハ、ア一段【九オ】と能ふ御座る ハ、

ア御蔭でさばりと致いて御座る 扱此方には衣の御用意は御座る

か 左様な者は用意致外せぬ 幸是に愚僧の懸替の衣が御座る 是を此方へきせて進ぜ外せふ 是は何から何迄も慮外で御座る 何と能似合【九

ウ】外るか 一段と能ふ似合外る 迎もの事に得と見て被下い 前から

見ても後から見ても殊の外能僧柄で御座る 夫は悦敷い事で御座る 未だ

チト御願が御座る 夫は又如何様な事で御座る 何卒名を付けて被

下い 何名を【十オ】名を付けて呉い 中く 只今迄の御名は何

と申外る 只今迄は治夫と申と申外る 何治夫く 一段と能ふ御座る 治

夫にして置せられい 夫では何とやら出家らしゆ御座らぬに依て何卒

法名を付けて被下い 何法名が【十ウ】付てほしい 中く 近頃

安い事では御座れ共是は又此方にも定た旦那寺も御座るふ程に あれへ

往て付て貰わせられい 成程旦那寺も御座るが 御坊の御弟子成た

事で御座るに依てやはり御坊に付てもらい度ふ御座る【十一オ】すれ

は是非共で御座るか 左様で御座る チト待て被下い 心得外した

是は如何な事 愚僧は今迄終に人に法名を付た事が御座らぬ 是は

先何と致そふ イヤ伊呂波四十八文字は片の如く存じており外るに依て

是を何と【十一ウ】哉引直いて付て遣ふと存る イヤ申く早ふ付て被

下い 何が扱付て進ぜ外せふが惣じて法名と申物は其家く に定まて付

く字が御座るが 此方の御家は何と言字を遣わせ被る、 私の家には

代々下モに蓮の字を付外る【十二オ】れんの字とは はちすの蓮で御

座る エ、はちすの蓮文字で御座るか 中く 夫ならば能い名が

ん 中く いれん何とやら気に入舛せぬは、気に入舛せぬか 中ノ  
 \【十二ウ】いれん気に入らずは はれん坊とは何とで御座る 是も  
 いやで御座る 夫がいやならば ほれん坊とは何とで御座る 其様  
 ないな名はいやで御座るもそと長い名を付て被下い ハ、ア長い名が  
 能ふ御座るか 中く 何とで御座るふぞ ヲ、能い【十三オ】名が御  
 座るは 何とで御座るちりぬれん坊とは何とで御座る 是も気に入舛  
 せぬ 夫が気に入らずばよたれん坊とは何とで御座る 是もいや  
 で御座る 夫が気に入らずはやまけれん坊とは何とで御座る 是も気に  
 入舛せぬ ちひもせず京れ【十三ウ】ん坊と付て置しめ 其様なむさと  
 した名はいやで御座る 扱く 此方は名に用がま敷い人じや 用がま  
 敷ふはなけれ共 迎も付けてもろふからならばもそつと呼能いよ名  
 が付て欲ふ御座る ちトまたせられい 心得舛した【十四オ】是は  
 如何な事伊呂波四十八文字事くく申て御座れ共 何れも気に入らぬと  
 申 最早名が御座らぬ 是は先何と致そふ ヲ、夫く 能い名が有はイヤ  
 申く 能い名が御座るは 何とで御座る 呂蓮坊とは何とで御座る  
 何ろれん【十四ウ】中く ろれん一段と気に入舛した ハ、ア  
 ろれん御気に入舛したか 中くろれん坊ときめ舛ふ 夫ならば呂  
 蓮坊と極めさせられい 扱此上は此方の御弟子に被成れて 諸国修行を  
 させて被下い 何が扱諸国修行【十五オ】行をさせて進ぜ舛ふぞ イ  
 ヤ申く これのふはどれに御座るぞ 最早一飯も出来上り舛した 是のふ  
 はどれに御座るぞ 是は如何な事御出家は一人じやと仰られたに二人い  
 らる、イヤ申く 是のふはどれに御座るぞく【十五ウ】是く身共  
 じや是に居 女共く 是にいと言に ヨ引ヤイくく 和男己童に相談  
 なしに 能もく 坊主に成おたなく 扱くそなたはわ、敷人じや  
 夫じやに依ては兼く 出家に成度くくと言たれば 和御料成【十六オ】

ても苦敷ふ無いと言たではないか エ、腹立やく あれは仮初言にこ  
 そ云へ 毎童が坊主になれと云た 早元の通りに成をれい やい  
 其上身共はさのみ成度ふも成かたが アノ御出家が坊主と云物は能い者  
 じや成れくと【十六ウ】に依て成た 云分有らば アノ御出家にお  
 しゃれく すればアノ出家が坊主に成れと申舛たが 中く エ、  
 腹立やく ヤイくく 和坊主己能ふもく 童の夫を坊主に仕おつた  
 なく ア、是く 先心を静めて【十七オ】能ふ御聞やれ 夫じやに依  
 て加様な事は御一門衆や又御内儀共得と御相談の上ならば成らぬと申  
 たれば 和御料や御一門衆も皆御得心の上じやに依て是非共坊主にして  
 呉いとおしやつたに依て刺た 云分有らば御亭主に【十七ウ】おしやれ  
 く すれば童が得心していると申舛したか 中く エ、腹立やく  
 \ヤイく 和男毎童が得心じやと言た早元の通りに成おれいやく  
 最前も云通り身共はいやじやくと云たれ共アノ出家が是非なれくと  
 言たに【十八オ】たに依て成た 云分有らば アノ出家におしやれく  
 身共は知らぬぞくく エ、腹立やく 己喰裂て退ふか引裂いて退  
 ふか 早元の通りに毛をはやせいやい 何じや元の通りに毛をはや  
 せ 中く 二三年【十八ウ】もしたならば 元の通りに毛をはゆる  
 で有ふぞ(笑) エ、未だ其連な事を云己喰裂て退ふか引裂てのけふか  
 アゆるいて呉い 〓 〓 アノ和坊主誰そ捕へて呉い 遣るまいぞく  
 \〓〓。【十九オ】

## 〔仕手〕

- 一 能力頭巾 一 無地のし目
- 一 無地腰帯 一 寄水衣
- 一 珠数 一 扇子

一 脚伴 一 狂言袴かゝり

一 へん哲を竹にはさみ左に肩ゲ

一 剃刀 一 たすき懐中ス

〔アド〕

一 半上下出立

一 能力頭巾懐中する

〔女〕

一 一女 一式

一 但し仕手長衣袈裟にて

出る事も有へし 〔十九ウ〕

茂山社中

橋本治夫

〔橋本氏印〕 〔裏表紙〕

翻刻 『長光』

〔橋本氏蔵〕

〔平物集狂言〕

大藏流

長光 六義

〔橋本氏夫〕 〔表紙〕

大正拾三年四月

仕手 すつば 〔表見返し〕

長光

罷出為者ははるか遠国の者で御座る 某永々在京致す処に訴詔思ひの儘に相叶ひ安堵の御教書給わり国元への御暇迄も被下て御座る 此様な満足な事は御座らぬ 扱に付今日は寺町の市で御座るに依てあれへ参り何ぞ土【一オ】産物を調べて下ふと存る先そろりくと参ふイヤ誠に国元では此様な事とは存ぜいでけふかあすかと唯待兼て居るで御座る戻て此様子を咄いたならば唯皆の者が悦ふで御座るふイヤ参る程に 早寺町じやチト見物致そふ ハア是は何じや 【一ウ】こりや絹布店そふな金蘭緞子綾錦 扱もく結構な事かな 罷出為者は洛中を走り廻る 心も直に無い物で御座る 今日には寺町の市で御座るに依てあれへ参り何ぞ能い物も御座らば調儀致そふと存る先そろりくと参ふイヤ誠に 【二オ】今日には門出を祝ふて御座るに依て何ぞ仕合の無いと申事は御座るまい イヤあれに田舎者と見へて 賣物に見入て居る 見れば眉合の延た奴で御座る 其上能い太刀を持って居る チト當て見ふと存る ハア是は何店じや ヲ、何みせじや 【二ウ】是は子供の持て遊店そふな誠に子供の遊び店そふなでんく太鼓ふり鼓 ビイく風車 あれにしほら敷い シポラポウも有は 其通りじや 是は如何な事扱く 都と申所は由断のならぬ所じや何者やら身共の太刀へ手を懸るチト店 【三オ】を替ふ 是は如何な事眉合の延た奴かと存じて御座れば眼の鞘のはずれた奴じやハア店を替るそふな今一度當て見ふハア是は何店じや ヲ、何店じや 是は茶道具店そふな誠に茶道具みせそふな風呂釜 茶碗茶入 水指し 【三ウ】水こぼし 火箸羽箒 あれに能い夏目も有は 其通りじやヤイそこな奴己人の持っている太刀になぜ佩ぞ 己社人の佩っている太刀になぜ手を懸る是は身共のじやこちへをこせく こちへをこせく 誰そ出手合へ

くくア、先【四オ】待てく 汝らは此御政道正敷御代に何事をわつ  
 ぱと云ぞ私の持っている太刀を佩て我物じやと申舛 イヤく私の佩て  
 いる太刀に手を懸我物じやと申舛 是は身共のじやこちへをこそ  
 くく ア、こりやく身共が出てからは【四ウ】聊爾は成らぬ、  
 先是を身共へ預けい まづ此方は何なたで御座る 所の目代じや  
 目代殿ならばきつと御禮を申舛る 私も御礼を申舛る 礼には及ばぬ  
 先是を某へ預けい 夫ならば預舛るが必アノ者に遣て被下るな  
 ヲ、遣る【五オ】事では無い 申チャト捕へて被下い ヤイく  
 汝も預けい 私のもで御座るに依て預くるには及舛せぬ アノ物は預  
 けたに依て汝も先預けい 夫ならば預舛るが必きやつに遣て被下るな  
 ヲ、遣る事では無いヤイく 汝は何国の者なれば何【五ウ】事をはッば  
 と申ぞ 此方も聞て被下い私は遙か遠国方の者で御座るが永々在京  
 致所詔思ひの儘に相叶ふて御座るに依て 近日国元へ下り舛る 夫に付  
 今日土産物を調べに此所へ参り 市立をしており舛ると毎の間にやら  
 アレあの者が【六オ】何方からやら参て私の持っている太刀を佩て  
 我物じやと申舛る 夫を一ツ二ツ申上ての事で御座る目代殿ならば  
 きつと仰付られて被下い アノ者の口をも聴ふ暫く夫に待て 畏て御  
 座る ヤイく 汝は何者なれば何事ろんずるぞ【六ウ】此方も聞て  
 被下い(アドと同断) 目代殿ならば急度仰て被下い 心得た暫く夫に  
 待て 心得舛た是は如何な事どちらを聴ても同じ事を申 ヤイく  
 誠汝の物ならば 国作を知っているか 中く私の太刀で御座るに依て  
 聞たよりはましに存て【七オ】居り舛る 夫ならば云て見よ先太刀は  
 備前物で御座る ホン備前に取ても名は長光此方も御存じで御座るふが  
 ながは長うみつは光ると書た文字で御座るきやつは存舛るまい問て見さ  
 せられい 心得た(仕手へもアドへ云た通り問と仕手も/アドと同じ

様に答へる也)【七ウ】きやつは何も存舛るまい 問て見させられい  
 きやつは知っていると云は きやつは知ると云は 暫く夫  
 に待て畏て御座る ヤイく 誠汝の物ならば 地肌焼付を覚へて居る  
 で有ふ 中く 覚へており舛る 夫ならば云て見よ【八オ】先鑑元  
 より物打迄は直焼で御座る ホウ 夫より鋒へ懸て大亂に乱焼で御座  
 て是を物にたとへて申そふならば霜月師走の頃薄氷の上を薄霜の降懸た  
 如くくわツくと身の毛もよだつ程の恐いみで御座るき奴は存舛るまい  
 問て見て被下い 心得た【八ウ】(萬同断仕手も同断) ヤイく 誠汝  
 の物ならば 寸尺を知っているで有ふ 如何にも存じており舛るき奴は  
 知っているか問て被下い。心得たヤイく 誠汝の物ならば寸尺を知てい  
 るで有ふ 如何にも存じており舛るき奴は存舛るまい問て見て被下い  
 あの者【九オ】は知て居ると言は ヨウき奴が存じていると申舛るか  
 中く き奴の知ふ様は御座らぬが夫ならば先き奴から云へと仰  
 られい 心得たヤイく 先汝から云て見よと言は 夫に付私は田舎者  
 で御座る物言聲高に申舛るに依て定めてき奴が聴取り【九ウ】口真似を  
 致す者で御座るふ此度は寸は囁いて申舛ふ 是は能い所へ気が付た一  
 段と能かるふ 夫ならばこちへ御座れ 心得た 申くき奴が  
 承り舛る 心得たヤイく 汝はつふと夫へ依ていよ 畏て御座る寸  
 は ヲ、 寸は ヲ、【十オ】イヤ申き奴が聞舛る ヤイく  
 汝は夫へ依ていよと云に 心得舛た 寸は ヲ、 寸は ヲ、  
 で御座るお、一段と能ふ言た暫く夫に待て 畏て御座る ヤイく  
 アノ物は言た程に汝も早ふ言へ(アド同断) 寸は囁て申舛ふ夫が能かる  
 ふ こちへ御座れ【十ウ】心得た イヤ申くき奴が承り舛る  
 汝は夫へ依て居よ 心得舛した 寸は ヲ、 寸は ヲ、  
 で御座る 御座るではわからぬ 寸は何とじや早ふ云へく。イ

ヤ申き奴が聞舛 汝は夫へ依ていよと言に 畏て御座る 寸は  
ヲ、 寸は ヲ、 でゞ【十一オ】御座る で御座るではわか  
らぬ早ふ言へ ヤイく早ふ云へく名は長光ながは長みつは光  
ると書た文字で御座る 夫は国作で合点じや 寸は何とじや早ふ言へ  
く ばばと身の毛もよだつ程の恐敷い身で御座る 夫は地肌焼付  
で合点【十一ウ】じや 扱は水破で有ふ 丸裸にして遣舛せふ 最早  
能ふ御座る能ふ助かりやくゆるいて呉いくく 己憎い奴の  
イヤ申アノ様な者をおふて居り舛 ちやと捕へいアノ水破 誰ぞ捕へ  
て呉い遣るまいぞくくく。【十二オ】

〔仕手〕

- 一中格子 一色無厚板／壺折に
- 一ゑん尾 一髭
- 一狂言袴 一腰帯
- 一タスキ(女帯 腰帯／珠数等懸つける)
- 〔アド送どほり〕
- 一半上下出立
- 一太刀 一脚伴
- 〔目代〕
- 一長上下出立【十二ウ】

茂山社中

橋本治夫 (橋本氏印) 【裏表紙】

注

- (1) 坂本清恵・加野友理・野見山優・野中くれあ(二〇一六)「大蔵流茂山家狂言  
台本の翻刻と紹介」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二二一
- (2) 坂本清恵(二〇一六)「現代能楽の音便」『論集』一一一
- (3) 大倉浩(一九九五)「狂言記にみるサ行四段動詞のイ音便形」『文藝言語研究』  
言語篇二七

Typeset Versions of Shigeyama Family Kyogen Scripts of the Okura  
School: "Keinyo," "Niku Juhachi," "Roren," and "Nagamitsu"

SAKAMOTO Kiyoe, KAWAKAMI Mayuko, HAYASHI Miki, and  
Szilagyi Andrea

[Abstract] In the 2014 academic year, the Department of Japanese in  
the Japan Women's University Faculty of Humanities acquired 27  
volumes of kyogen scripts from the Shigeyama Sengoro family of the  
Okura School of the traditional form of Japanese comic theater known  
as kyogen. Typeset versions have been produced of four of these  
works: "Keinyo," which bears the signature of Shigeyama Masakazu  
and the "Shigeyama Library" seal, and "Niku Juhachi," "Roren," and  
"Nagamitsu," which bear the signatures and seals of Shigeyama  
members and of Hashimoto Haruo.

Shigeyama Masakazu, who is Shigeyama Sensaku III, put the 184  
kyogen works that are presently in the Shigeyama Sengoro family  
into organized order, and like them, the texts here constitute materials

documenting the kyogen works of the Sengoro branch of the Shigeyama family from the mid- to late 1920s. By comparison with the scripts in the Nomura family of the Izumi School, which are of the same period, the scripts in the Sengoro family are distinguished by the more frequent occurrence of "i" onbin in the "sa" column of sounds (euphonic sound change from "shi" to "i" in words), which is a characteristic of kyogen.

[**Keywords**] Kyogen Scripts of the Shigeyama Seng Family, "Keimyo", "Niku Juhachi", "Roren", "Nagamitsu", "i - onbin in the /s/ row"